



# 晴天の心

立教 185 年 2 月号  
大阪府富田林市寿町 4-9-10  
URL: [www.tomiishi.net](http://www.tomiishi.net)  
TEL: 0721-23-3466 090-5243-4669



月次祭 2月19日(土) 午前10時～

婦人会例会 2月9日(水) 午前10時～



オミクロン株と呼ばれる新型コロナが再び三度(みたび)感染拡大に至っています。本当に身近なところでも感染者が出るようになってきて、日々早く収束するようにおつとめをつとめながら祈っておられることと思います。

そんな中、トンガでの火山の噴火、そして九州での地震。

春季大祭を前に親神様が私たちに示されているのは、何なのかを改めて考えないといけない時旬であると思います。温暖化が叫ばれていますが、もし万が一今回の噴火よりも大きな噴火が発生した場合は、地球を噴煙と雲で覆われてしまい、寒冷化となってしまうともいわれています。

また今回の噴火では人類が作り出すおよそ 100 年分の Co2 が排出されたとも言われています。

これらは今の人間の力ではどうすることも出来ない事象です。そして、これらのコントロールは親神様の意思だと考えると、本当に守られて生かされていることに至ります。

春季大祭という仕切りの月にお見せいただいたこれらのことを、各々が真摯に受け止めより一層親神様のご守護に感謝するとともに、存命でお働きくださっているおやさまにお応えできるように努めさせていただきます。 (南河内支部月報巻頭言) 伏井啓之

今年 3 月で 3 年間務めてきた支部長の役を、退くことになりました。うちのような小さな教会が支部長という大役を務めることはもったいないことだと思います。もっとも、こうゆう役回りが出るように考えたのはもう 10 年近く前からになります。支部委員会を教会ではなく公共施設を使うことで委員会の開催時間の短縮と駐車場問題を解消し、規模が小さい教会でも支部長を担当していただけるようにしてきたのです。じっさい、会議時間は短くなり、事前に情報を掴めば月報も事前に作成することが出来て、当日に修正するなんて無駄な作業と事務負担が減りました。また、実績から陽気暮らし講座や成人講座の開講も行えるようになったことは、一つのにをいげとも言えます。このあと、支部教会地図帳の更新発行が、今期の仕上げとなると思います。さあ、勇んで務めます。

「いんねんというは心の道」  
いんねんというは心の道、と言うたる。  
心の道と言うたるで。

今日の  
おやのことば



おさしづ 明治40年4月8日

原文は、特定の事情について繰り返して伺っているかなり長い「おさしづ」ですが、一読してこのお言葉が心に残ります。「おさしづ」を拝読していると、原文の文脈を離れてそのフレーズに心を惹かれ、さまざまな思いを巡らすような、印象深いお言葉が幾つもあります。その代表的なものの一つではないでしょうか。

### 「いんねんというは心の道」

このお言葉から私の心に浮かぶのは、小学校の校庭の風景です。かつて学んだ学校のグラウンドは、土が流れやすく、雨が降ると雨水の流れる筋道が何本もできました。水はけが良いためすぐに乾くのですが、また雨が降ると同じ所に雨水が流れる。乾いているときは、ほとんど溝のように見えない所にも、不思議と雨が降ると水が流れていました。

よく雨水を堰き止めて、流れを変えて遊んだものです。しかし、何回も繰り返して雨水が流れると、溝が深くなって流れを変えることができなくなる。最後には新たに土を入れて、ローラーで押し固めなくてはなりません。

毎日の繰り返しの中で、なかなか反省すべき習慣や心のつかい方を改められずに苦勞する。このような人の姿を目の当たりにし、自らも経験するたびに、この雨の日の風景を思い出します。もう一度土を埋め直さなくては、流れを変えることはできない。そのような状態になる前に、心の向きを変えていきたいものです。(岡)

因縁（いんねん）言う言葉を、WEBサイトで調べると

1. 仏語。物事が生じる直接の力である因と、それを助ける間接の条件である縁。すべての物事はこの二つの働きによって起こると説く。
2. 前世から定まった運命。宿命。「出会ったのも何かの一だろう」
3. 以前からの関係。ゆかり。「父の代から一の深い土地」
4. 物事の起こり。由来。理由。「いわれ一」「一話」
5. 言いがかり。「一を付ける」というように説明されています。また例に挙げられているように使っています。



親神様、おやさまの教えの原典である、おふでさきやみかぐらうたでも、いんねんという言葉が使われています。しかし、少し意味が違うことがあります。

「おふでさき」ではもっぱら、「元のいんねん」の意味で使われています。すなわち、親神様おやがみさまが陽気ぐらしを見て共に楽しみたいと、元のぢばにおいて人間を創造されたという元初もとはじまりに由来するいんねんです。

親神様の教えでいういんねんには、仏教などでいう因果応報とは違い、その奥に、陽気ぐらしへ導こうと

される子供可愛い親心があることを忘れてはなりません。

親神様の教えは世界一れつを陽気ぐらしに導く教えであります、銘々一人ひとりにとっては、運命を切り換える教えであります。また、ひいては世界の運命をも切り換えていく教えである、ということができると思います。

このままうかうかと、人間が皆気ままな通り方をしていると、遠からず人類全体が滅びてしまうことにもなりかねません。

そうであればなおさら、一人ひとりの運命を切り換え、人類全体の運命を切り換えて救い上げるための教えの使命は重大である、と言えましょう。

では、運命を切り換えるにはどうすればいいのでしょうか。

この教えは、拝み祈祷（きとう）の信心ではありません。願いどおりの守護ではなくて、



心どおりの守護を下さる神様でありますから、日々の心遣い、通り方を改め、転換することによって運命を転換する教えであります。

おさしづに、

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、  
どんな理も日々出る。(明治22・2・14)

とあります。

人間は身体は親神様からお借りしている、心だけが自分のものです。

そのたった一つの心からどんな理も、健康も、また、家々の治まりも、仕事の上のことも、何もかも一切の御守護が、このたった一つの心の使い方から出てくる、とおっしゃっているのであります。

ですから、心の道を切り換え、親神様にお喜びいただけるような心に入れ替えていくことによって、自分を取り巻く一切のものがより良い方向へと切り換わっていくということでもあります。

心を入れ替えるためには、まずこれまでの通り方を反省しなければなりません。この反省をし、心遣いの間違いを払拭(ふっしょく)するプロセスを、ほこりに託してお教え下さっているのであります。そして、親神様のお受け取り下さるような心に入れ替える。さらに、その心をしっかりと定めて変わらないように持ち続ける、実行するということが肝心です。その年限の積み重ねの中に、運命が切り換わっていくのであります。いんねんが切り換わっていくと申してもいいでしょう。

いんねんという言葉だけを聞きますと、何かちょっと暗いような感じがするかもしれませんが。しかし、いんねんという語は、元々は悪い意味では使っておられません。おふでさきの中にはいんねんという言葉が何度も出てまいります、はっきりと悪い意味でお使いになっているのは、

このよふハあくしまじりであるからに いんねんつける事ハいかんで (一・62)

この一首だけあります。それ以外はすべて元のいんねんという意味でお使いになっていると申せます。

元のいんねんというのは一言で言うと、人間は、親神様によって元のぢばで、陽気ぐらしをするために創(つく)られたということです。これはそういう意味では明るいいんねんです。

ですから、いんねんという言葉だけを聞くと、ちょっと暗いような気がするというのは、これまでの使われ方、お道だけでなく、元々は仏教に由来する言葉でしょうが、古くから多分に暗い説き方がされてきたことによるのでしょう。

運命といい、いんねんというようなことを申しましたが、要は、親神様のお喜び下さるような心を定めて、これを日々実行する、そうした通り方の積み重ねが運命を切り換えていくことになるんだ、ということでもあります。

これは逆に言うと、親神様の思召(おぼしめし)に合わないような心遣い、通り方をずっと積み重ねていくと、運命がだんだんと下がって来るということにもなります。それは埃(ほこり)を払うことなく、ほったらかしにしておくと、だんだんと黒ずみ汚れて、ついには一寸(ちょっと)やそつとではきれいにならないようなものであります。

毎日掃除している家であれば、ハタキをかけたぐらいできれいになるかもしれませんが、一週間も十日も放っておくと、ハタキぐらいではきれいにならない。もう何年もということになれば、雑巾(ぞうきん)で拭(ふ)いてもきれいにならない。ついにはこそぎ落とそうかということになったり、あるいは、もう捨ててしまおうということにもなってくるのであります。



## 入り込んで働いていただくために

別席のお話、「このほこりが積もり重なるにより、親神様が体内に入り込んで働くことが出来ん、と仰せられます。人間も同じこと、ほこりだらけのその中で、きれいな働きは出来ますまい」という一節があります。

ほこりだらけの心遣いで通っていながら、親神様に入り込んで働いてもらおうと思っても、そんなむさくるしい所へはよう入らん、とおっしゃっているということです。

人間でも同じだろう、仕事場が埃だらけ、散らかし放題ではいい仕事はできまいと、非常に分かりやすい例えを用いておっしゃっています。

ですから、ほこりを払って心を澄ますということは、親神様に入り込んで働いていただく、また親神様の思召を分からせていただくための非常に大切な角目であります。

その心のほこりを払うための手掛かりとしてお聞かせ下さっているのが「八りのほこり」の話であります。

## ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの八つのほこり

きれいな心になりなさいよ、というようなことはどんな宗教でも言うだろうと思います。

しかし、もっと具体的に、どのように掃除をし、心をきれいにするのか、ということをお教えいただいているのが「八つのほこり」の話であります。例えば子どもたちに、きれいにしておけと言ったところで、掃除の道具はどこにあるやら分からない、どういうふうに掃除していいのやら分からんということだってあるでしょう。

ここにハタキがある。ハタキはこういうふうに使うんだよ。箒（ほうき）は、雑巾は、と教えてもらったら、どんな子どもでも掃除の仕方が分かるようなものであります。

ただ心をきれいにしなさいというだけではなく、ほこりの心遣いを八つ数えあげて、しかも、それを詳しく説き分けて下さっていることによって、非常に身近で、実行しやすいものになっていると思います。

## 22万キロお疲れさんでした

9年の間和子の足として、送迎などで活躍したモコが、この1月で廃車となりました。走り屋プレオの後でもっさりした動作だっただけに、まあいろいろありましたが、22万kmも軽自動車で走れたとはほんといい車でした。ミッションのトラブルで走行時に危険だと言うことから、お正月期間に次の車を探し、今月25日に納車されました。次の車はワゴンRです。1年落ちの2600km走行の新古車です。26日には本部参拝に早速初使用させていただきました。この車も長く乗れることを願っています。



黒いモコ お疲れさんでした。ありがとう！ そしてブルーのワゴンRいらっしゃい！